

Episode 1

夫がやっと出勤していった。

私は今、自宅マンションのバルコニーでタバコを吸いながら一息ついている。

なんであんな男と結婚してしまったのだろう。この結婚は失敗だった。会社の行き帰りの間に、事故にでも遭って帰ってこなければいいのにと願わない日はない。こんな生活がいつまで続くのだろうか？ 一生続くのか？ それはごめんだ。

夫と結婚して三年になる。付き合っている時にはわからなかったのだ。あ

んなに自己中心的な男だったとは。

何かと言えば「妻は家にいろ!」「買い物以外は外に出るな」「買い物は一時間で済ませろ」「俺が電話をした時には家にいろ」だ。

もううんざりだった。男なんてみんなこんなもんだろうか? 私は一步も外には出られない。友達とのランチも許されない。用事があつて外出する時は前もって夫に言つて、承諾を得なければならぬのだ。

忘れていた支払があり、コンビニに払に行くことだつてある。ほんの十五分家を空けただけでも文句を言われる。そのたびにストレスが溜まるのだ。「女は家にいるものだ」という古臭い考えを持っていると分かっていたら、あんな男とは結婚しなかった。

交際中は優しかったのだ。旅行に連れて行ってくれたり、誕生日や記念日

には忘れずにプレゼントをくれた。私はそうした付き合いの中で、「この人
しかない」と思ってしまった。今では後悔してもしきれない。

私は籠の中の鳥と同じだ。自由は一切ない。ストレスは溜まるばかりで、
唯一癒される時間といったら、バルコニーでタバコを吸う時だけだった。
タバコは二十歳を過ぎた頃から吸っていて、未だにやめられないでいる。
夫もそれだけは許してくれた。ただし「部屋で吸うな、吸うならバルコニ
ーで吸ってくれ」と言われた。

部屋の中にタバコの匂いが付いて気分が悪くなるそうだ。それは私も理解
できることだったので、灰皿を持って、バルコニーに出ることにしていた。
ただ冬場は寒い。そんなことは夫にはお構いなしだった。

あの男といると息が詰まる。あいつと同じ部屋にいるくらいなら、外でタ

バコを吸った方がマシだった。

私は鼻から煙を出しながら、バルコニーのフェンスにもたれて、ぼんやりと離婚のことを考えていた。考えてもいつも答えは出なかった。それを夫に切り出す勇氣もないし、両親に心配をかけたくもなかったのだ。

目の前の変わらない景色だけが、今の私の唯一の逃げ場だった。この場所は外から覗かれることもなく、誰とも視線を合わせることもないので気に入っていた。隣はアパートだったが、それは眼下だ。ここは三階なので、景色を遮るものは何もなく日当たりもいい。

住み始めたころは、下に見えるアパートを煩わしく思ったが、今ではさほど気にならない。慣れてしまえばどうでもよかった。